学位論文要旨

『サルヴァジュニャートマンの不二一元論思想

―シャンカラとの比較を通して―　』

文学研究科仏教学専攻博士後期課程3年

佐　竹　正　行

本研究は、インド正統派六派哲学の一つウ゛ェーダーンタ哲学、その中の不二一元論学派の人物であるサルウ゛ァジュニャートマンの思想を、彼の主著であり、シャンカラやその弟子、後継者達の間に提起された問題を総括した重要な著作『サンクシェーパシャーリーラカ』に基づき考察するものである。具体的には、不二一元論学派における重要な概念についてのサルウ゛ァジュニャートマンの見解を考察し、それらの概念の間に共通する、或いは前提とされるサルウ゛ァジュニャートマンの不二一元論思想を考察するものである。

同時に、不二一元論学派の開祖と目されるシャンカラの思想を、彼の唯一の独立作品と目される『ウパデーシャサーハスリー』を中心として考察し、サルウ゛ァジュニャートマンと比較することによって、シャンカラからサルウ゛ァジュニャートマンへの初期不二一元論学派思想の変化、展開を考察する。

従来のサルウ゛ァジュニャートマン思想研究は不二一元論学派思想全体を取り扱う際に、少しだけ触れられるものが主流であった。そのため、ある個別テーマに関する不二一元論思想を述べる際に、簡単に学説として、サルウ゛ァジュニャートマン思想が言及されるに留まり、その詳しい内容や実際の見解との差異は論及されてこなかった。また、それぞれ個々のテーマの思想史的展開のみに労力が払われ、その思想が、サルウ゛ァジュニャートマンの他の思想とどのように関係するのか、或いは矛盾するのか、といったサルウ゛ァジュニャートマン個人の思想の中で論及されることはなかった。

そこで本研究は、サルウ゛ァジュニャートマンの思想を彼自身の考える不二一元論学派思想を基礎として、一つのまとまった体系としての「サルウ゛ァジュニャートマン思想」という体系を、彼の思想を詳しく論及する中で、明らかに使用とすることを示したものである。（序論第1章）

サルウ゛ァジュニャートマンに関する伝記的記述を考察し、彼の師がスレーシュウ゛ァラであるかどうか、彼の生存年代はいつ頃であったのかを論ずる。『サンクシェーパシャーリーラカ』の記述に基づき、彼の師がスレーシュウ゛ァラであるのかデーウ゛ェーシュウ゛ァラであるかに関する議論は、確実な論拠を欠くために決定することは不可能である。しかし、註釈等に基づく伝統的見解やサルウ゛ァジュニャートマンの思想とスレーシュウ゛ァラの思想の類似から、スレシュウ゛ァラをサルウ゛ァジュニャートマンの師と考える方が適当であることを明らかにする。

更に、サルウ゛ァジュニャートマンの生存年代については、彼の同時代者や、シャンカラとの関係、後代の不二一元論学者による引用の問題に触れるこいとで、サルウ゛ァジュニャートマンの生存年代の上限と下限を設定し、上限をシャンカラの生存年代より２世代前後後、およそ50年前後後を条件とし、下限を、彼の思想について触れているアーナンダボーダの生存年代に基づき、およそ11世紀頃まで、であることを明らかにする。（第2章）

インド思想において重要な概念である無明は、既にウパニシャッドの頃に術語化されており、そこでは、単なる「知識の欠如」ではなく、知識と並立的な「誤った認識」として実体化、形而上学化されている。この無明について、シャンカラは付託と同一視、「誤った認識」そのものと定義している。このようなシャンカラの無明観は、不二一元論学派において、早くから捨て去られ、他の多くの無明観が存在していた。

サルウ゛ァジュニャートマンは、『サンクシェーパシャーリーラカ』で言及することによって、このような多様な無明観が存在していたことを明らかにする。そして、サルウ゛ァジュニャートマンは、これらの無明観を全て論駁し、彼自身の無明観を明らかにする。サルウ゛ァジュニャートマン自身の無明観は、vikṣepaśaktiとāvaraṇasaktiの二種類の力を持ち、この力により、全ての原因である。無明は「付託そのもの」ではなく、「付託の原因」であると論じ、より実体的な原因とする。そして無明の基体と対象はブラフマン＝アートマンのみであることを主張する。

このように、サルウ゛ァジュニャートマンの無明観は、無明が何らかの実在性を持った、無始より存在する、非常に根源的な、形而上学的誤りであることを示している。（第3章）

無明を原因とする付託の概念は、古ウパニシャッドでは見られない。付託が初めて使用されたのは仏教の唯識学派においてであり、そこでは「非存在のものを存在する」と認識する誤った認識である。そして、付託は、インドの哲学学派の大部分で使用されており、シャンカラの『ブラフマスートラバーシュヤ』において論述されている。そこにおいて、付託の共通認識としては、「あるものに別のものが顕現される」という誤った認識である。

シャンカラは、この付託を、「アートマンと非-アートマン両者に起こる「相互付託」であると主張する。そして、この付託は無明と同一であり、無始無終のものとして存在する形而上学的な誤った認識と結論づける。

だが、この「相互付託」に関して、二元論、或いは虚無論になるのではないか？として、相互付託が成立しないのではないかという疑問が提出された。

この問題に対して、サルウ゛ァジュニャートマンは、不二一元論学派の相互付託は「実在と非実在の相互付託」なので、このような問題は生じないと主張する。さらに、この相互付託に関して、基体（adhiṣṭhāna）と付託の拠り所（ādhāra）という付託に関する新しい概念を導入し、「アートマンと非-アートマンの相互付託」から「付託の拠り所と非-アートマンの相互付託」（実在と非実在の相互付託なので、付託の拠り所も基体であるブラフマンとは異なるが実在である）へと展開することにより、付託に関する問題を解決したことを明らかにする。

このように、サルウ゛ァジュニャートマンの付託観は、「実在と非実在の相互付託」であり、付託に関する問題を除去するために導入した、基体と付託の拠り所の概念を使用し、「付託の拠り所と非実在の相互付託」であることを示している。（第4章）

次に、宇宙論の問題に関して、インド哲学では三種類の学説が認められている。ウ゛ァイシェーシカ学派等の、水や地等の結合により世界が生ずるというĀraṃbhavāda、サーンキヤ学派等の、根本質料等の開展により世界が成立するというPariṇāmavāda、不二一元論学派の、世界は無明によりブラフマンから生じたものであり、本来は幻であるというVivartavādaである。PariṇāmavādaとVivartavādaの両者は、非常に類似している。この両者は、原因と結果（＝世界）がともに実在とするPariṇāmavādaと、原因のみが実在で、結果（＝世界）は原因の顕現（vivarta）とするというVivartavādaの形で分けられる。

シャンカラは、『ブラフマスートラバーシュヤ』で、これらの宇宙論の語を使用していないけれども、他学派の宇宙論に関しては、激しい批判を行っている。しかし自身の宇宙については、はきいりと言及していない。一般には、Vivartavādaを主張しているとされるが、Vivartavādaの語のみならず、それに関係する語も使用していない。シャンカラ自身の見解としては、彼以前のヴ゛ェーダーン多学派の論者達と同様に、Pariṇāmavādaを主張している。しかしシャンカラのPariṇāmavādaでは、ブラフマンからの開展ではなく、彼自身の導入した「世界の種子」としての「未開展の名称と形態」が展開するものである。その際、「未開展の名称と形態」は、水と汚れのように、ブラフマンと同一ではないものの、その中に存在するために完全に異なるものではないとして、実在であると主張する。このように、シャンカラは、実在性の差異という概念を宇宙論の中に導入しているものの、この差異がどのように異なるのかについては言及していない。しかしながら、原因と結果という関係ではないものの、宇宙論の中に実在性の差異の概念を導入することで、シャンカラはこれまでのPariṇāmavādaの考え方からVivartavāda的な考え方への変化のきっかけを与えた人物である。

サルヴ゛ァジュニャートマンは、『サンクシェーパシャーリーラカ』の中で、宇宙論として4種類の見解があることに言及している。以前の3説と仏教徒のSaṃghāṭavādaの4種類である。サルヴ゛ァジュニャートマンは、これらのうち、聖典に矛盾するために認められないとして、SaṃghāṭavādaとĀraṃbhavādaを排斥する。そして、残る2つの見解、PariṇāmavādaとVivartavādaを認める。サルヴ゛ァジュニャートマンは、この2つの異なる見解が同時に認められる矛盾について、宇宙論に関する見解は、階段のように段階的に組み上げられていて、下の段階へ登ることで、その次の上の段階に昇ことが出来るという形をとる、と主張する。そしてこのPariṇāmavādaとVivartavādaの両者に、解脱の段階を組み入れることで、サルヴ゛ァジュニャートマンは3種類の段階で、一つの宇宙論が出来上がっていることを主張する。この3種類の段階は、それぞれ、Pariṇāmavādaは、世界はブラフマンからのみ開展するだけという形で、サーンキヤ学派的なPariṇāmavādaを排斥し、ヴ゛ェーダーンタ学派的なPariṇāmavādaを主張し、この見解では、日常的な実在を認める段階年て位置づけられる。Vivartavādaは、世界はブラフマンの顕現であり、波に映った月のように、世界は映像であり、本来は非実在である段階として位置づけられる。ブラフマン＝アートマンの見解は、この映像のような迷妄の世界を破壊する究極的な檀界であり、解脱の段階として位置づけられる。

このように、サルヴ゛ァジュニャートマンは、初めて不二一元論学派にVivartavādaの語を導入した人物である。そして彼は、Pariṇāmavāda、Vivartavāda、解脱の段階という3種類の世界の段階を認めるという形で、PariṇāmavādaとVivartavādaの両方の宇宙論が同時に認められることを示している。そして、この宇宙論は、下から上への段階へ登っていくという形の段階論的構造を取るものであり、なおかつ、その段階は実在性の差異によって形作られていることを明らかにする。（第5章）

次に、世界の中に存在する個我については不二一元論学派では、Ābhāsavāda、Pratibimbavāda、Avacchedavādaの3種類の見解が認められている。Ābhāsavādaは、主宰神が無明に限定され、その属性を得たブラフマンの顕現であり、個我が無明の創造物である統覚器官に限定され、その属性を得たブラフマンの顕現である。この個我の顕現は、限定する統覚機関が多様であるために、多数存在する。そしてこの顕現は、ブラフマンから異なっているので、虚妄であり、非実在である。Pratibimbavādaは、２種類あり、プラカーシャートマン説とサルヴ゛ァジュニャートマン説がある。プラカーシャートマン説では、主宰神は無明に限定されたブラフマンであり、個我は無明の創造物である内官とその潜在印象に映し出されたブラフマンである。この個我の映像は映し出す内官が多様であるために多数存在する。サルヴ゛ァジュニャートマン説では、主宰神は無明に映し出されたブラフマンであり、個我は内官に映し出されたブラフマンであり、原型であるブラフマンは清浄なままである。この個我の映像は映し出す内官が多様であるため、多数存在する。このPratibimbavādaの最大の特徴は、この映像が映像として実在することである。Avacchedavādaは、主宰神は無明の対象であるブラフマンであり、個我は無明の基体であるブラフマンである。この個我はそれぞれ無明を所有しているために、無明が多数存在し、個我が多数存在し、なおかつ現象世界が多数存在する。

そして、これら3説とは別に、もう一つ別の見解、Ekajīvavāda或いはDṛṣṭisṛṣṭivādaと呼べれる見解が存在する。dṛṣṭisṛṣṭivādaは、主宰神は無明に限定されたブラフマンであり、個我は無明に写し出されたブラフマンである。そしてこの無明は一つしか存在しないために、個我は一つしか存在しない。この個我が自身の無明の力で、一切の世界、聖典、師までも創造する。しかし後代の不二一元論学派では、この見解は独立した見解ではなく、Pratibimbavādaの一種とし、映像の条件としてEkajīvavādaでは無明で、Pratibimbavādaでは内官で映し出されると主張する。

サルヴ゛ァジュニャートマン自身は、不二一元論学派で、最初にPratibimbavādaを主張した人物であるが、彼の著作の中では、Pratibimbaの語は使用しているものの、Pratibimbavāda或いはĀbhāsavāda、Avacchedavāda等の個我に関する見解の語は使用されていない。サルヴ゛ァジュニャートマンの見解では、主宰神は無明に映し出されたブラフマンの映像であり、個我は無明の創造物である自我意識等に映し出されたブラフマンの映像であるこれは、赤い花が雲母に写し出され、赤い雲母として現われる映像として存在し、水の中に映る太陽の映像が、その水を入れている容器により異なる、多様であるということで、身体等の容器により映し出された個我は異なり、多様である、太陽自体は清浄であるという例により説明される。

そして、更に別の箇所で、この主宰神と個我を作る要素は、原型と限定（＝無明や統覚器官）と原型の顕現と映像の4つの要素が存在する。ここで、顕現は非存在、映像は存在と主張される。

このようにサルヴ゛ァジュニャートマンは、個我に関する見解としてPratibimbavādaを主張しているものの他の不二一元論者とは異なり、唯一顕現と映像の両者を混在させ、とを完全に分ける前の両者の見解の端緒の位置にある人物である。また、Ekajīvavādaに関して、この語を使用していないものの個我は一つしか存在せず、その個我は唯一の無明に映し出されたブラフマンとし、この個我により他の全てのものが作られるとする。そしてこの見解は夢眠状態の認

識が覚醒状態においても成立するという例により、本来の経験と矛盾しないと主張する。このような多数の個我のPratibimbavādaと唯一の個我のEkajīvavādaの両説は、両者ともに個我が映像であるとし、Vivartavādaにおいて、段階的に、最初に多数の、次に唯一の個我の状態へと登っていくという形で位置づけられ、別々の独立した見解でないことが主張される。

このように、サルヴ゛ァジュニャートマンは、不二一元論学派において、初めて顕現とは異なる映像という実在の概念を導入し、Pratibimbavādaを主張した人物である。そして、共に映像である個我の多数と唯一の違いが生ずるとしてEkajīvavādaを主張し、この両方の見解を、Vivartavādaの中に段階的に位置づけた最初の人物である。（第6章）

次に、不二一元論学派の重要な概念である「大文章」について、この「大文章」の概念は、本来ミーマーンサー学派等で使用された「複合文」を意味する語である。この語自体はシャンカラやスレーシュヴ゛ァラにおいては使用されたいない。サルヴ゛ァジュニャートマンは不二一元論学派で、最初にこの語を導入し、「tat tvam asi」や「ahaṃ brahmāsmi」等の特別な文章を示し、解脱の原因となる文章であり、なおかつ「従属文」の助けによりその意味が明らかにされることで、「大文章」はブラフマンとアートマンの同一性を示す、従属文の助けにより明らかになる「特別な複合文」という概念として術語化した。

この「大文章」の解釈方法として、この文章は間接的な表示方法によってしか理解出来ないものである。シャンカラは、その解釈方法として、矛盾と一致の方法を使用する。例えば「tat tvam asi」において、「tat」と「tvam」が「asi」という同一判断を示す語により結合され、共通の拠り所を持つもの、同一の対象を持っているとして、「tat」が「tvam」と同じように「内我」を意味する。このような両方の単語に存在する、または両立しうる意味を追及していく方法が一致（anvaya）である。それとは別に、両方の語における両立しない意味、「tvam」における「苦しむ者」と「tat」における「非内我」の意味を排除して両立しうる意味を追及していく方法が矛盾（vyatireka）である。

しかし、シャンカラのこの方法は、既に彼の直弟子達により捨て去られている。

サルヴ゛ァジュニャートマンは、この解釈方法として、三種類の間接表示の方法を、不二一元論学派に最初に導入する。その中の部分的間接表示が「大文章」の解釈方法として用いられる。サルヴァジュニャートマンは、「tat」と「tvam」は、本来の意味では同一でないことが示される両者の中の意味の一部、限定であるものを取り除き、両者の中の意味の一部分、語の本来の意味ではないブラフマンと内我の部分を示し、両者の同一性を証明するために、部分的間接表示の方法が適用されるとしている。さらに、同一の不可分の実在であるブラフマンと内我が、不可分の実在と限定であるもの、その両者の混合したものの三種類の形で、「tat」と「tvam」の意味を形作っているとし、混合したものが、「tat」と「tvam」の本来の意味であるとしている。

さらに、このような考え方に示されている実在の段階が、　「tat」と「tvam」の意味の分析に関連して、satya等の語の本来の意味の分析が行われている中で、satyaが、日常的な実在の段階と内我などの究極的な段階、そしてその語の本来の意味を示す両者の混合した実在の段階の、三種類に分ける考え方が言及され、この両者の実在に関する三種類の分割に関する見解は、それぞれ類似し、対応しあっている。例えば、Pariṇāmavādaと虚空等の日常的な実在の段階、解脱の段階である究極の見解と内我等の究極的な実在の段階、そして共に両者が混合したものとするVivartavādaと本来の意味で表わされる実在の段階として表わされるように、それぞれ類似し、対応しあっている。

このように、サルヴ゛ァジュニャートマンは、不二一元論学派において、「大文章」の語を初めて導入し、その解釈方法としての部分的間接表示の方法を確立させた人物である。この部分的間接表示で示される実在の概念は、彼の他の概念における実在の差異の概念に対応している。（第7章）

最後に、解脱について、不二一元論学派の解脱論としてのJīvanmuktiについて論じた。Jīvanmuktiは生きている間に悟りを開くことにより、解脱するものの、新たな業を作ることはないが、既に活動した業の力が消滅するまでは留まり続けるという形で、完全に業の力が消滅した状態と区別される形で、解脱を分けて考えている。このようなの考え方は、マンダナミシュラにより初めて導入された解脱観であり、彼と同時代の人物であるシャンカラやスレーシュヴ゛ァラ等では使用されていない、不二一元論学派の最初期においては、特別な解脱観である。

シャンカラの解脱観は、輪廻は無明を原因としているとし、それはヴェーダの知識のみによって取り除かれるものであると主張している。そして無明とは、アートマンと非-アートマンとの間の相互付託という誤った認識であり、誤った認識は、真珠母貝を銀と見誤る場合のように、正しい認識が起こると、そのまま存在しなくなるもののため、段階的に得られるものではなく、直ちに起こるものである。シャンカラは、解脱に関して、生きている間、或いは死後の解脱に関して言及していない。シャンカラにとって解脱とは、あくまで誤った認識の破壊によって起こるものであり、そのため正しい認識が起これば、直ぐさま起こるものである。シャンカラにおいては、アートマンはそもそも永遠に解脱していて、それを妨げる無明である相互付託によって、解脱をしていないように錯覚している。それがヴェーダの知識により取り払われるだけで、それ以前も以後も、アートマンは変化することなく存在し続け、他のものは非実在であり続けることを前提としている。そのため正しい認識が起こった瞬間、解脱はそのまま存在し、死後の解脱や生きたままの解脱という差異を認める必要を、シャンカラは感じていないこのようなシャンカラの解脱観は、彼以前のヴェーダーンタ学派の解脱観と完全に異なっているだけではなく、彼とほぼ同時代人であるマンダナミシュラの解脱観とも異なっていて、シャンカラにより不二一元論学派の解脱観として、新たな解脱観、知識を得た瞬間の解脱が主張されていると考えられる。

サルヴ゛ァジュニャートマンは、解脱として、Jīvanmuktiを認めている。だが、それは、聖典に記されていることから仮定的に認められるべきものであり、本来は直ぐさまの解脱（sadyo mukti）の方が正しいものと主張されている。仮にJīvanmuktiが存在するとしても、それは既に知識を得ている賢者においてのみのことであり、それは迷妄（＝無明）が破壊されたとしても二元性の状態、痕跡が残っており、それを知覚するために、そして説明するために

Jīvanmuktiは存在する。さらにその際、このJīvanmuktiの状態が存在するのは、無明によってではなく、無明の痕跡（avidyāleśa）、或いは香りや潜在印象などと呼ばれるものによってである。無明の痕跡は、無明でもなく、その部分でもないものであり、無明自体は除去されているので、それとは異なる、そこで除去されない活動し始めた業のようなものであることが述べられ、これを享受し終わった後に、肉体のない最高の解脱に到達すると主張している。

これとは別の、シャンカラのような直ぐさまの解脱も主張しており、サルウ゛ァジュニャートマンは解脱について、無明の破壊であるとしているものの、それはそれによって、何らかの変化を加えられるものでなく、そのまま不変であり、常住なものであるとして、生ずることも滅することもない、ただ解脱それ自身であることだと主張している。これは、解脱による無明の破壊で、解脱それ自身になっていること、自分が解脱の状態そのままであったことを認識するのみである。この考え方はシャンカラの解脱観そのままに、正しい認識が起こった瞬間、解脱がそのまま存在していて、死後の解脱や生きたままの解脱といったものを認めるていない。

サルウ゛ァジュニャートマンは、本来矛盾するこの2つの解脱観を両者ともに認めているのは、個我についての2種類の考え方を認めているように、その両方における解脱に、それぞれ適応させているためである。

このようにサルウ゛ァジュニャートマンは、マンダナミシュラと共にJīvanmuktiの概念を作り上げた人物である。彼は、Jīvanmukti的な見解が伝統説であり、ウパニシャッド等で説かれていたため、これを支持するためにJīvanmuktiの概念を作り出したのみならず、Jīvanmuktiを否定するシャンカラの見解も受け継ぎ、二種類の解脱観を主張した。そして、二種類の解脱観を取り入れ、組み合わせることで、シャンカラの解脱観と『ブラフマスートラ』以来の解脱観をともに認めようとした。（第8章）

以上のように考察してきたサルウ゛ァジュニャートマン思想の最大の特徴として、彼の多くの思想、特に付託論や宇宙論、個我論そして「大文章」の解釈方法に共通する実在の差異の観念がある。シャンカラ等の不二一元論者では、非実在と実在の概念で説明しているのに対して、サルウ゛ァジュニャートマンは、非実在としての実在とは別に、新たに、映像の概念、実在として存在する映像の概念を新たに不二一元論学派思想に導入した人物である。

更に、宇宙論や個我論、解脱論において、矛盾する複数の見解を認めることの矛盾を除去するために、サルウ゛ァジュニャートマンは、それらの複数の見解を段階的に構造化させ、最初にある見解を理解した後で、次に、別の見解を理解することが出来るという形で、段階論的に理解、獲得することが出来るという形を作り上げている。

このような形で示されたように、シャンカラにおいては、実在と非実在の両者の対比のみしか考えられていない。しかしながら、サルウ゛ァジュニャートマンは、実在と非実在のみならず、これとは別に新たな実在の概念、映像として表わされる実在、究極的な実在が、非実在と関わる、結合する時に生ずる実在の概念が、導入されている。この実在の分類が、サルウ゛ァジュニャートマンの思想の個々の概念に関わっているように、この両者の思想の全体像に関係する大きな相違である。サルウ゛ァジュニャートマンはこの映像的な実在概念を導入することで、付託、個我、大文章の解釈方法、宇宙論等で、シャンカラとは大きく異なる、新たな不二一元論思想を展開している。

シャンカラが、「無明は付託である」とだけ言及することで、この付託の原因が何であるか、或いは無明の対象や期待の問題等について、殆ど触れることなく、「付託すべきでない」、「無明は誰にも属さない」等と意識的に、答えることなく、対話によって、誤りに気づかせようとするような形で論ずるのみである。そのため、シャンカラは、より詳細に、概念上の矛盾を取り除くような体系的、神学的な方向性で、その思想を作り上げていくよりも、宗教的な救済を重視する形で、その思想を作り上げている。これに対して、サルウ゛ァジュニャートマンは、不二一元論学派の後継者達の一人として、シャンカラの残した、矛盾や疑問に答えることが要請され、シャンカラの残した難点に答えるために、新たな概念の導入をはかるなどして、体系的、神学的な方向性を強めていった。

サルウ゛ァジュニャートマンの思想が、シャンカラに比べより体系化されていることは、彼の言及する個々の概念同士に、非常に強い共通性があることや、解脱論や個我論における、矛盾した概念を両立させるために、その概念同士を段階的に分類することで、それぞれの概念の位置を体系づけていることからも理解できる。

また、シャンカラが、「無明は付託である」と述べ、「アートマンに対する誤った認識」としてしか、最大の原因である無明を捉えていないのに対して、サルウ゛ァジュニャートマンにおいては、無明は、付託の原因であり、何らかの実在性を持つものとされ、宇宙の原因などとしても考えられているように、非常に形而上学的なものとして扱われていることからも、サルウ゛ァジュニャートマンにおいての方が、より体系的、神学的側面が強いと理解できる。

この両者の思想の展開は、仏教徒やミーマーンサー学派等の他学派を駆逐し、ウ゛ェーダーンタ学派の復興（＝不二一元論学派の誕生）に精力を注いだ人物であるシャンカラが、救済や、布教に大きな力を注いだ宗教者的な要素の強い人物であるのに対して、サルウ゛ァジュニャートマンが、不二一元論学派が確立して以降の人物であったことから、その教理を支える、或いは教理を体系化させ、矛盾をなくそうとしていく神学者的側面の強い人物であるという、両者の歴史的環境の違いによるものから起こったものであろう。